

1. 課程・論文博士の別 課程博士
2. 申請者氏名 関口すみ子
3. 学位の種類 博士（法学）
4. 学位記番号 博法第 179 号
5. 学位授与年月日 平成 16 年 2 月 19 日
6. 論文題目 政治変動とジェンダー
—— 「埒もなき大名の妻」から「賢母良妻」へ
- 7.
8. 関口すみ子.doc Word2000 win98
関口すみ子.txt

論文の内容の要旨

論文題目 政治変動とジェンダー
——「埒もなき大名の妻」から「賢母良妻」へ
氏名 関口 すみ子

「大名の妻ほど埒もなき者はなし」とは、荻生徂徠『政談』巻之四にある言葉である。従来、『政談』のジェンダーに関わる箇所についての研究はほとんどないが、じつは、徂徠は、巻之四で、武家の奥向きに関する問題を幅広く論じているのである。すなわち、大名の妻、妾（とくに御部屋）、女中などに関する問題点を指摘し、対処法を具体的に述べている。同様に、巻之二では、奥向きの奢侈（「内証の侈」）・「上方の者にだまされて出来たる格」・「大名をだまして物をとる事を専一とする」京都の人情・「かの公家の娘に付来る女房」等、総じて、大名の妻と奥女中・公家をめぐる問題について論じている。さらに、巻之一では、「武家の妻娘も傾城・野郎のまねをして」（「種姓の混乱」）・武家の妻女の奢侈というように、武家一般に関わる問題について述べている。総じて、問題の根源は、「諸大名……一年はざみの旅宿也。その妻は常江戸なる故、常住の旅宿也」にあるというのが徂徠の診断である。したがって、武士を土着させ、妻女も「田舎」に住まわすべきだというのがその処方であった。

『政談』は將軍吉宗に上呈されたものである。徂徠の照準は、諸大名家の奥の元締めたる大奥にあてられていたであろう。中でも注目されるのが、綱吉の大奥を名指しで批判していることである。

たとえば、徂徠が口をきわめて批判している「子を持ちたる妾」で「御部屋と名付け」られ、もっともらしい「諸事の格式」に囲まれて、しかし、じつは「妓娼あがり」であるとは、いったいだれのことを指すのであろうか。

『政談』上呈と前後する頃、巷では、その頃流行った唐の玄宗・楊貴妃の物語に綱吉をなぞらえて、淫靡な空間として大奥を描き出すことが大流行だった。その‘最高峰’が『護国女太平記』であり、また、漢文体の格調も高い『三王外記』である。これらは、おそらく、最も打撃を与えることのできる隠微な政治的攻撃であった。

なお、「礼」をたてられよという徂徠の訴えを吉宗がどこまで実行に移したのかは明らかではないが、少なくとも、それまで身分に事実上制限がなかった將軍生母（つまり、將軍の妾）は、吉宗の子家重以降、基本的に旗本（ないし公家）となっている。また、御部屋様ないし御内証御方と称されるのは、産んだ子が世継ぎになってからで、それまでは女中にすぎないという原則がうち立てられていった。

徂徠は、家格の表示・家と家との姻戚関係づくりの環という従来の大名の妻像を批判したが、「田舎」に送れという以外にとくに対案は出さなかった。それを継いで、新たな「大名の妻」像を提示したのが、上杉鷹山とその師細井平洲である。上杉家（米沢藩）という、由緒ある大家でありながら極貧にあえぐ藩の当主となった鷹山は、藩政改革の奥の中心として機能しうる大名の妻像を提示した。すなわち、「女訓」を学び、夫（大名）をたて、奥向きの儉約を率先して行い、さらには藩内の民にまで目配りする「国民の母」である。

白河藩でこれを見ていた松平定信は、鷹山に倣いながら、大奥にのりんで老女たちと対決した。しかし、定信が大奥を改革するよりも、むしろ、定信の改革の方が大奥でついでにしまったようだ。

定信辞任によって自由になったのは、大奥であり、家斉であった。以後、文化・文政・天保と、「大御所」時代も含めて半世紀に及ぶ家斉の治世が始まる。

文化・文政期には、大奥を中心に、江戸女性文化が花開いたと言えるであろう。だれもが三味線を習い、できることならお屋敷勤めをめざした。大奥や、大名・旗本の家の奥の様子は、歌舞伎の舞台などから窺い知れた。また、豊かな家の妻たちは、「上つかた」の奥方をまねた。

それは、政治的には、奥（大奥と中奥）に閉鎖的に守られた將軍の御代であった。

会沢正志斎は『新論』で、「国家の用を貶して、以て婦女の玩好に供す」と指弾し、大塩平八郎は、「奥向女中之因縁を以、道德仁義をもなき拙き身分にて、立身重き役に経上り」と幕政批判ののろしをあげた。

しかし、家斉は、今度は大御所として「西丸御政事」を始めた。とりわけ、側室お美代の方に連なる勢力が將軍隠居後も引き続き実権を握っていることに対して、「女謁」という非難が高まった。綱吉をめぐるささやかれた、愛妾と佞臣よりなる將軍家の奥（大奥・中奥）という物語は、ふたたび燃えさかった。

また、加賀前田家に降嫁した溶姫をはじめとする、家斉の大勢の子どもたちの養子・婿入り・降嫁問題が、御三家をはじめとする大大名家を痛めつけた。

そのとき、「牝蕪の害」の除去を掲げて大奥と幕政への介入を始めたのが、水戸徳川家を継いだ、正志斎の教え子徳川斉昭であった。だが、結局、隠居に追い込まれた。息子の徳

川慶喜は、「老女は実に恐るべき者にて、実際、老中以上の権力あり」とつぶやいている。

家斉は、天保十二年（一八四一）に大往生し、大御所時代にようやく幕が下りた。とはいえ、その後の家慶・家定・家茂・慶喜の四代を合わせても、徳川幕府にはあと二十七年しか残されていなかった。『真佐喜のかつら』の筆者によれば、「家斉公御他界後、御改革より追々四民共衰微して安心の時を得ず 然のみならず両御殿数度の炎上、京都大内裏同断、諸国凶作飢饉も有之、殊には大ひ成地震風災、めづらしきは異国船渡来、於將軍家は御早世も打続、老若其外の役人、今日の盛は翌日衰へにいたる事、筆紙につくしがたく…」

幕府は起死回生をかけて、「公武合体」のために、皇女の降嫁を願い出た。しかし、その皇女は、「内親王・皇妹」という地位を手にしてから大奥にのりこんできた。それゆえ、大奥は御所風と武家風に真つ二つに割れ、やがて瓦解の時を向かえてゆくのである。

さて、ついに権力をとった志士たちは、まず、大奥と入れ替わりに入城した宮中から、なんとしても「女権」を排除しようとした。女官から「数百年来の女権」を剥奪し、他方で、政事に口を挟むことを忌諱し、「国民の母」をめざす皇后を育成した。

そもそも、皇后が幼少の頃から学んでいたのは、加賀前田家の儒者西坂成庵が執念をもって刊行した『校訂 女四書』であった。また、侍講となった元田永叙が「上杉鷹山ノ女訓」を使って皇后をさとした。

さて、御一新によって大奥という頂上は瓦解したが、それによって、社会一般のジェンダー編成がただちに変わったわけではない。攻め上った勢力にとり、江戸（東京）は「御一新」の対象でもあった。同時に、「文明」社会に入るにあたって、日本のジェンダー・セクシュアリティ・システムへの「文明」（西洋人）の目を本格的に意識せざるをえなくなった。

西洋に本格的に対面した日本は、そもそも文明ではジェンダー秩序がアベコベだと感じて、当惑した。「男女同権」とは、なによりもまず、思想問題であったのである。西洋のレディ・ファーストの慣行が声高にとりざたされ、西洋風「男女同権」への警鐘が鳴らされた。その後、じつは西洋にも「男女同権」などはないのだと断じることで、「男女同権」ではなく、「男女同等」へと道が開かれた。

また、文明社会に入るにあたって、「一夫一婦」というハードルを掲げる西洋を前に、婚姻形態・妾・遊郭など、ジェンダー・セクシュアリティの体制全般を見直す必要が生じた。西洋との認識のズレをめぐる大混乱を引き起こしながら、ジェンダー秩序それ自体が、世間一般の一大争点となっていった。大奥・奥なきあとの江戸女性文化、とりわけ、娼妓が攻撃にさらされ、なかでも福沢諭吉は、彼女たちを「人間外」の地位に追いやることで、文明国としての体裁をなんとか繕おうとした。以後、こうした、江戸女性文化の断罪、女性が性関係と絡めて何かを得ることへの侮蔑が、（上流婦人をもその標的にしながら）近代日本の言説の底流となってゆく。それは、弱者をさらに道徳的に断罪し、抵抗を禁じて、ただ汚名をひきうけることだけを求めるものであった。

創立されるべき国の、ヨリ広い政治の領域におけるジェンダー配置の問題に関しても、男女同権・女子参政の権論、女帝論など、様々な議論が噴出した。

しかし、こうした動揺と喧噪のただ中から生まれた大日本帝国のジェンダー秩序は、およそ政治の領域から女性を一掃するという徹底性をもったものであった。それは、西洋思想の洗礼を受けながらも、最深部で儒教思想に支えられ、(井上毅の考えでは)「陰陽」の実現をめざしたものであった。すなわち、近代日本のジェンダー・システムは、その創成期において、古代中国の理想の実現を読み込まれていたのである。それでいて、それは、西洋をも含めた普遍的真理として語られた。こうした思想的徹底性を根底にもちながら、つぎには、「国民の母」皇后を先頭とした「賢母良妻」の群れの育成をめざすものとして、女子教育が構想されてゆく。それは、儒教的世界観を根底に、西洋近代を選択的に摂取するものであった。

総じて、ジェンダーは「御一新」という政治変動に大きくかかわり、また、逆に、政治変動によって大きく影響を受けたのである。